

第3部

有識者による考察

※本調査の設計・実施にあたっては、質問項目の設定などの調査票の作成等について、2名の外部有識者から助言を得たところである。

第3部では、この2名の有識者による考察を紹介する。

第3部 有識者による考察

偏位する「社会的孤立」－その意味と課題

古賀 正義
(中央大学)

1. 社会関係資本の欠落－中退者事例研究の示唆

若者の生きづらさが問われて久しい。一言でいえば、社会の中に自分の居場所がみつからず、将来への展望が描けない疎外された状態をさす。その原因は多様であり、対人関係のなかで精神的に生きづらい人もいれば、生活苦から経済的に生きづらい人もいる。引きこもりや不登校などにみられるように、周囲からは動機がわかりにくく、ポスト青年期の中で、生きることに関し長く苦痛を感じ続ける場合が多い。そうでありながら、周囲からはコミュ障や忍耐力不足など、本人自身の資質や人格の問題性が指摘されやすい。

リストカット体験のある雨宮（2008）は、述べる。「自分病みたいな状態がすごく長く続いて、自分の存在意義を得られなくては生きていけない、生きている意味がないとずっと思ってきました。」生きづらさの感覚は、対人関係の回路を見失い、有用性のない自分との対話を際限なく繰り返す過程で生じる。本人が生まじめに生きようとすればするほど、深刻に増幅していく感覚なのである。

本来若者は、家庭だけでなく学校や職場、地域のサークルなど多様な社会関係によって生きられる自己のアイデンティティを構成していた。しかしながら、高校中退者を調査してみると、家庭の協力が乏しく、学校で助け合う関係や居場所もなく、相談できる人が周りにいなかったという理由があげられやすい。非行などによって学校の規範から逸脱したのではなく、むしろ規則正しい生活慣習が支えきれず他者との関わりの入り口を失ったとする訴えが頻出する（古賀 2015、2016）。

若者の就学への環境の影響を研究した社会学者コールマン（原著 1988）は、「社会関係資本」という概念を使って、この問題に答えた。勉学を支える資源には、文化資本や経済資本のように、家庭の教育力によって学習の財や動機付けなどが向上するものがある。しかしながら、その条件が類似していても、中退が低率となる高校群があるという。そこには地域の保護者相互につながりがあり（「閉鎖系」と称する）、退学を忌避する言動や振る舞いが日常的に共有されていた。つまり、交わされる学校の情報に「期待と返礼という相互信頼」があり、それを第一に、情報の「結節点」（チャンネル）が構築され、私事を越える「公共の規範的感覚」が生徒たちを取り巻いていたという。

「社会関係資本」の存在は、グラノヴェッターの離転職における若者を取り巻く「弱い紐帯」の影響や、バートの論じた労働の場で有利な地位を得る者の対人関係を説明した「構造的隙間」の議論などからよく知られる。他者との何らかの社会関係があることによって、現場（場の文脈）に適合しそこでの利益を手にする度合いが変わってくるという見方である。俗に言えば、他者からのコネや引きあるいは人気やウケも、これによって変わるといえる。

社会学者ブルデューも指摘するように、「知り合い承認している者同士の、制度化された持続的関係のネットワークを所有することによる、個人や集団に蓄積される現実的仮想的資源の総和」と社会関係資本を定義しておくことができる。個々人の能力を超えた他者との関係の力が若者の行動特性や将来生活を変えていくという見方であり、新たな資本の価値と獲得の戦略を示唆する

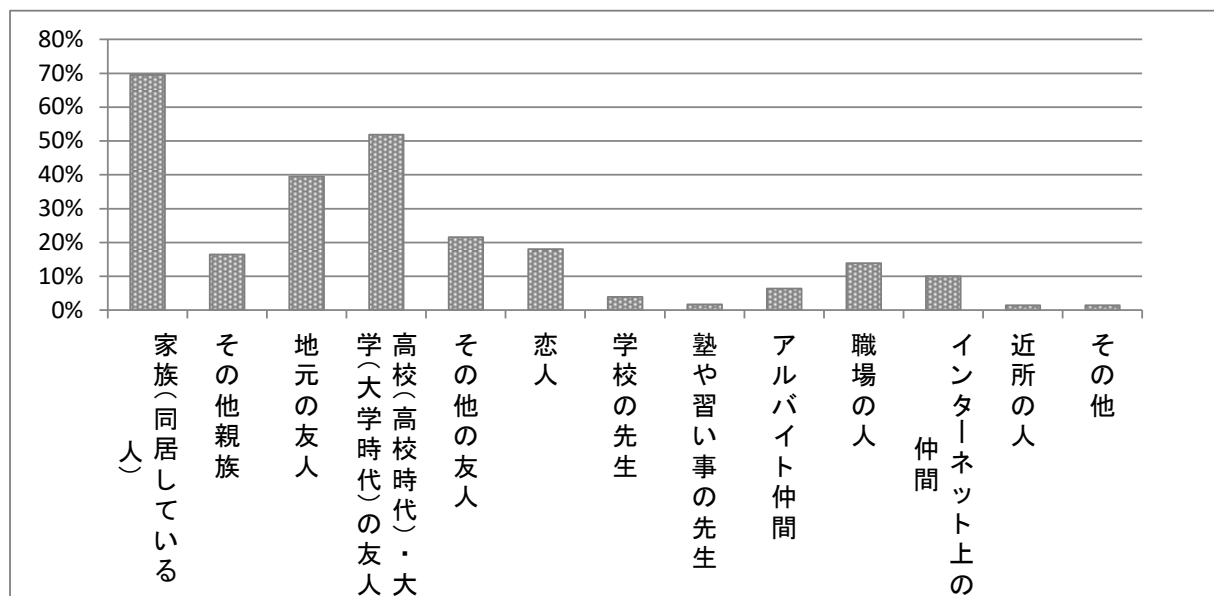
点で重要である（野沢 2006）（1）。

2. 調査からみる社会関係の偏位

そこで、本調査（全国 WEB 調査）のデータに、社会関係資本の視点を重ね合わせてみよう。若者たちの幅広い持続的な関係性はどのように生まれ、どのような者に顕著といえるのだろうか。言い換えれば、他者とコミュニケーションをよくとり、より社会参加していく若者層の特徴とは何なのか。データから見える範囲で論じてみる。

普段の生活でどのような人と、会話であれメール等であれ、よくやりとりがあるか、「接触相手」の項目を尋ねてみた（図表 1）。一見してわかる通り、「家族（同居）」が 7 割弱、次いで、「高校・大学（時代）の友人」が 5 割強、さらに「地元地域の友人」が 4 割弱となっている。回答者の年齢層が就学時期を含めて幅広いため、「恋人」や「職場の人」、「アルバイト仲間」、「ネット上の仲間」の回答もあるが、いずれも 20%をきっている。（ただし、これまでアルバイトや仕事をした経験がないため、「アルバイト仲間」「職場の人」に回答しなかった者が全体の 3 割弱いる。）

図表 1 接触相手の現状（複数回答）



若者には、とりわけ家族（配偶者を含む）・学校を介した友人・地域の地元友だちの 3 つの種類
の他者との接触が多くなっている。ちなみに、どれか 1 種類の他者を選択する人は、家族のみが
大半であり、29.3%を占める。次いで 2 種類の他者を選択する人は 23.5%、3 種類以上の他者
を選択する人（その半数は 3 種類だけである）は 47.2%とほぼ半数となる。学校を起点とした友人
関係の広がり強い影響を与えていると推察される結果である。

これら他者の存在は、個々人のライフコースにおける継続的な一定の場（ネット世界も可）の
共有から生成する関係（multiplicity）とみられるので（鈴木 2008）、これらの人を「コアな他者」
と呼んでおきたい。

3. 基本属性との強い関係

そこで、いかなる属性の若者にどのような「コアな他者」が認められやすく、また彼らの社会
活動はどのような広がりになっているといえるのか、みてみよう（図表 2）。ここでは、より広い
他者関係が可能である若者層の傾向を見るため、これまでアルバイトを含め就労経験がないと回

答している者を除いて分析する。(実際には「コアな他者」の選択傾向には就労経験の有無は大きな影響を与えておらず、就労経験あり層となし層で比較すると、1種類の他者選択 29.3%≒32.3%、2種類選択 23.5%≒26.2%、3種類以上選択 47.1%≒41.5%となっている。)

図表2 性・年代別の接触相手

		N	家族(同居している人)	その他親族	地元の友人	高校(高校時代)・大学(大学時代)の友人	その他の友人	恋人	学校の先生	塾や習い事の先生	アルバイト仲間	職場の人	インターネット上の仲間	近所の人	その他
【性別】	男性	3063	64.1	11.1	37.6	48.8	19.4	14.8	4.4	1.6	5.2	13.6	10.3	1.4	1.7
	女性	2937	75.1	21.9	41.4	55.0	23.8	21.3	3.3	1.8	7.7	14.3	9.8	1.5	1.0
【年代別】	15～19歳	1961	71.4	11.9	47.6	69.9	19.7	14.8	4.9	2.9	6.0	2.8	10.4	0.5	0.8
	20～24歳	1947	68.0	15.2	36.8	51.4	20.9	23.1	5.1	1.1	9.3	13.8	9.2	1.4	1.2
	25～29歳	2092	69.0	21.6	34.4	35.2	23.9	16.2	1.7	1.2	4.2	24.5	10.5	2.3	2.0

まず、「(同居の) 家族」を選ぶ人たちの特徴をみる。第一に、シングルファミリー等も増えるなか、父や母、きょうだいらとの同居の割合がいずれも7割を上回り、高率である。また、女性が多く(女性 75.1%>男性 64.1%)、既婚者や専業主婦などでの割合も高い。反面、年齢の区分による影響がほとんどなく、10代後半から20代後半まではほぼ同じ比率である。関連するのか、家庭の暮らし向きが「よい」+「どちらかといえばよい」とする人で、「どちらかといえば低い」+「低い」とする人より回答率がかなり高くなる(71.7%+72.7%>65.3%+57.2%)。

他方で、興味深いことに、家庭へのパラサイトがあるためか、「現在は就業していないが、過去に就業経験がある」人が、「就業している」人より高い割合を示す(74.7%>66.2%)。例えば「学生」である人と、数は少ないが現在「無業者」である人とで、回答の割合が変わらない(69.6%≒71.8%)。

さらに、インターネット等の利用を見ても高い割合となる。「たいへんよく使う」+「かなり使う」人がそれぞれ7割にも上り、「あまり」+「ほとんど使わない」層との差が大きい(71.7%+67.1%>54.9%+48.9%)。他の設問結果にもあるように、「自分の部屋」や「自分の家」を居場所と回答する人が非常に多いが、家庭の滞在時間が長く緊密なことが活動の内容(メールやSNS利用など)にも影響している結果であろう。

では、「高校・大学(時代)の友人」を選ぶ人たちの特徴はどうか。「家族」の接触を選択する層と、場は異なりながら、半数強は重なっていく。第一に、ここでは年齢層の違いが大きい。高校・大学の就学期である10代後半や20代前半では、20代後半と異なり、当然ながら直接の学校生活・友人関係の影響が大きく、コミュニケーション頻度が高い(69.9%>51.4%>35.2%)。女性がやや多いが、「家族」の選択ほどではない。

職業でいえば、「学生」が圧倒的に高く(72.2%)、「正規」「非正規」の就業はともに4割程度(40.2%、35.8%)で変わらないが、「無業者」が極めて低くなる傾向がある(17.6%)。学生時代のネットワークへの入りにくさがあるためだろうか。学校化した生活への適合と友人関係の密度との関連をうかがわせる。

インターネット等利用をみると、やはり高い割合となる。「たいへんよく使う」+「かなり使う」人がそれぞれ5割強にも上り、「あまり」+「ほとんど使わない」層との差は大きい(53.7%+51.0%>37.1%+17.0%)。学校を介した他者との接触とネットでの接触は一体性があるといえる結果である。

最後に、2つの接触相手とは異質な傾向がある「地元の友だち」を取り上げよう。ここでも、約半数に「高校・大学(時代)の友人」の選択との重なりがあるが、地域単位での就学となる中

学校卒業直後の影響もあるためか、10代後半に、20代前・後半世代以上の選択がみいだせる（47.6%＞36.8%，34.4%）。性差はほとんどみいだせない。

職業についてみると、多少「学生」が高いものの、「正規」「アルバイトを含む非正規」就業者との差はかなり小さい（44.6%≒38.4%，36.4%）。ちなみに「無業者」は依然低い（21.3%）。就業の有無との関係をみても同様に明確な差異はみいだせず、地元つながりの強さは、学校のような制度的な場と異なり、学校の同級生などをスタートとしながらも、個々の選択的な人間関係の継続とみられる結果であった。

インターネット等利用では、「地元友だち」がいる者の方が「大変よく使う」「かなり使う」ともやや高い割合となるが、「高校・大学（時代）の友人」の結果と異なり、「あまり」「ほとんど使わない」人との割合の差が小さくなってしまふ（41.5%+37.1%＞30.8%+14.8%）。ここでも、関係維持の緩やかな特質が見いだせる。

このように3種類の「コアな他者」にはつながりの質的な差異があり、「（同居）家族」が接触相手の基本となったうえで、いくつかの学校を媒介とした関係が重ね合わされていく性質があるとみられる。

4. 交流する人の偏在と「社会的孤立」

では、「コアな他者」と数多く関わりを持っている若者とそうでない若者では、どのような生活の実感や社会参加活動の差異があるのだろうか（図表3）。

図表3 接触人数別の社会参加状況・将来の自分像

	N	【社会参加の活動】						【将来の自分】				
		映画などの鑑賞	スポーツ	自然体験	観光	地域行事	あてはまるものはない	何でも話せる人がいる	共通の趣味を持った仲間がいる	自分の収入で暮らせる仕事についている	周りの人や社会の役に立っている	なりたいたい自分に近づいている
接触相手1種類	1245	32.8%	18.5%	9.9%	17.1%	4.8%	43.7%	17.8%	15.0%	13.9%	10.2%	10.4%
接触相手2種類	998	49.8%	26.7%	13.9%	32.6%	9.6%	28.7%	21.1%	18.8%	18.0%	9.1%	10.2%
接触相手3種類以上	2000	62.6%	37.4%	23.8%	47.7%	21.7%	17.7%	33.6%	29.5%	23.3%	14.9%	17.5%

先にあげた接触相手の設問で、何種類の他者をあげたかによって、3つのグループを構成してみた（これまで何らかの就労経験がある者のみ対象）。1種類の他者選択は、大半が「（同居）家族」だが、友人だけをあげる場合もある。2種類の選択も、「（同居）家族」と「高校・大学（時代）の友人」の組み合わせが多い。3種類以上の選択は、「地元の友だち」が加わり、すべての「コアな他者」を含むケースが多くなる。先に述べたように、半数弱がこれにあたり、意外に多重な関係性がある若者は少なくない。以下、「1種群」「2種群」「多種群」とそれぞれを表記しておく。

まず、生活の充実度からみてみよう。「充実している」「どちらかといえば充実している」とする割合で見ると、多種群が他群よりきわめて高い割合となる。具体的には、多種群が22.2%+54.5%で約8割が「充実している」と回答しているのに比して、2種群が17.5%+48.5%で約6割、1種群が17.6%+37.5%で6割弱にすぎず、その差は大きい。なぜか。

居場所と思える所を回答してもらうと、多種群は多くの場所で2種群や1種群より高い割合を示した。例えば、「自分の部屋」では、「そう思う」の割合で、それぞれ66.6%＞60.7%＞55.3%となる。比較的他者との関係性に関わらない場と思えても、他の場の居場所感覚の広がりがないと、強く感じ取ることができないようだ。「家庭」（48.4%＞38.7%＞28.0%）の結果もまったく同様である。それ以外の場の回答でも、「どちらかといえばそう思う」の割合まで含めると、「学校」

(55.6%＞40.7%＞34.5%)、「職場」(45.8%＞33.7%＞33.3%)、「地域」(65.9%＞55.5%＞44.9%)と、群間の差が非常に大きくなる。

このことは、それぞれの場の生活の充実や安心があることと不可分である。家族、学校の友人、職場の人、地域の人との関係性も問うているが、ここでも接触・コミュニケーションが多いというだけでなく、「楽しく話せる時がある」や「困ったときは助けてくれる」などの項目で、多種群と他の群との差がある。

例えば、家庭の関わりでは、「楽しく話せる時がある」に関して「そう思う」とする者は、多種群 48.6%＞2 種群 36.3%＞1 種群 21.5%と大きな開きがある。同様に、「困ったときは助けてくれる」では、多種群 46.0%＞2 種群 35.9%＞1 種群 21.8%と、ここでも差が大きい。学校、職場の結果も傾向は同一である。ただし、「地域」となるとここまでの違いはなく、「どちらかといえばそう思う」まで含めて、「楽しく話せる時がある」でも、多種群 30.5%＞2 種群 22.0%＞1 種群 23.9%、と差はかなり小さくなる。いずれにしても、家庭・学校・職場のどこもが有用な場を感じられるのは、多種の接触相手を持つ層の特性であるといえる。

図表 3 に示したように、多種群は 2 種群と比較しても、特別に社会参加の経験が豊かである。高い割合を示す上位 5 つの項目で各群を比較しておいた。「映画等の鑑賞」「スポーツ」「自然体験」「観光」「地域行事」のいずれでも、多種群は 10%以上活動が多くなっている。反対に「あてはまるものはない」という回答が、1 種群の半分以下である。活動参加と接触相手の多重化は強く関連しているとみられる。

さらに、活動参加の動機も多種群ほど多元化していくとみられる。「楽しそうな時」＝多種群 70.8%＞2 種群 59.0%＞1 種群 43.38%、「自分のやりたいことを発見できそうな時」＝多種群 39.1%＞2 種群 32.8%＞1 種群 18.5%、「いろんな人との出会いが期待できる時」＝多種群 34.7%＞2 種群 29.8%＞1 種群 15.8 %、「新しい技術や能力を身につけたり経験を積んだりすることが期待できる時」＝多種群 25.2%＞2 種群 16.8%＞1 種群 8.68%など。余暇的な参加動機から学習的なそれまですべてに多種群が積極的な評価をしていた。

最後に、再度図表 3 から、10 年後に自分の生活がどうなるかを問いかけた将来展望を見ておこう。ここでは、多種群の特徴が冒頭に述べた「生きづらさ」の感覚と裏返しになっていることがわかる。「何でも話せる人がいる」、「共通の趣味を持った友人がいる」、「なりたい自分に近づいている」といった関係性や自己像の項目では回答の割合が高い。しかしながら、付言しておけば、「周りの人や社会の役に立っている」や「自分の収入で暮らせる仕事についている」というような有益性の問いになると回答率が低くなり、社会関係の資本による貢献と同時に一定の限界も感じさせる。

5. SNEP 論をこえて一関係の起点となる場の存在を問う

ここまで多くの他者とのコミュニケーションが緊密であり、さまざまな場を居場所と感じ取れる若者群の存在を指摘してきた。ここでは、一種群のように、家庭でのコミュニケーションに多くを依存し広がりがない若者層が、概して基点となる家庭についても多種群より低い評価をしていることを指摘した。多元的な関係性のもつ「生きやすさ」の効用を指摘することができる。しかしながら、こうしたコアな他者関係の起点は概して家庭・学校の 2 点にあると指摘できる。

従来、SNEP 論に代表されるように、就労就学の機会をなく奪われ孤立する若者が問題視されてきた。もちろん、排除の果てに孤独になる若者が生じていく過程を注視しないわけにはいかない。しかしながら、ある関係の資源を異なる関係の資源と分離して論じるわけにはいかないこと

に注意が必要である。例えば実際家庭だけが良い関係で学校は悪い関係とはいかない。この調査の分析も示唆するように、関係の相互依存や創発効果が常に付きまとうからだ。

孤立をなくすことは、一つの関係を強固に構築することよりむしろ、さまざまな関係の可能性を感じて緩やかに生きられるようにすることにあるのではないか。本調査の結果からは若者の多くが実践するように、対人関係のなかでの多元化する自己像の支え方が必要であることが示唆された。この点で、緩やかな多くの立場の人と関わりを持つ機会を供給し支援していくことが、「社会関係資本」の存在を若者に感じ取らせ「生きやすさ」を保証する有効な方途であると思われる。

注（１）本稿であげる外国研究者の紹介は、野沢（2006）の文献からの転載である。

（参考文献）

雨宮処凛、萱野稔人、2008、『生きづらさについて』、光文社

古賀正義、2015、「高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査から—」、『教育社会学研究』第96集、47－67頁

古賀正義、2016、「高校中退者問題と格差社会」佐藤学ほか編『社会のなかの教育』（講座『教育・変革への展望』）139-167頁

鈴木努 2008「社会ネットワークの多層性・多重性・多様性」『社会学論考』29、首都大学東京 1-20頁

野沢慎司編・監訳、2006、『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房